Book Review

エリートはなぜ民衆を恐れるのか

Thomas Frank,
The People, NO : A Brief History of Anti-Populism
(Picador USA, 2021)

佐久間　　啓

トーマス・フランクは、*What's the Matter in Kansas*（2004）や *Listen, Liberal*（2016）などの著作で知られる、アメリカのジャーナリスト・歴史家である（Frank 2004, 2016）。とりわけ、*Listen Liberal* では、アメリカ民主党の変貌を批判的に分析している。民主党は、1930 年代以降、ブルーカラー層を主要な支持者としてきたが、1970 年代以降、機会の拡大、社会正義、さらに労働者にとっての公正な取引の確保といった伝統的な政策目標を諦め、緊縮へと舵を切った。その結果、階層格差の拡大に対して有効な対策を講じることができず、次第にみずからの支持基盤を切り崩してきた。こうして、労働者階級から専門的管理職階級（professional class）を主体とするエリートの党へと変貌を遂げた民主党の変質を描き出した同書は、2016 年の大統領選でのヒラリー・クリントンの敗北を予見した本として、大きな反響を呼んだ。

これに対して、2021 年（初版 2020 年）に刊行された本書では、アメリカにおけるアンチ・ポピュリズムの歴史を主題としている。2016 年のトランプ当選やブレグジット以来、ポピュリズムについては盛んに議論されてきた。だが、「左派ポピュリズム」を提唱するシャンタル・ムフなどの一部の論者を除いて、その議論の大半は、ポピュリズムを排外主義や反多元主義、反知性主義と結びつけ、民主主義の脅威とする見解を示している。

だが、本書によれば、アメリカ人民党の歴史的経験に見られるように、本来、ポピュリズムとは、寡頭政治を批判し、民主主義の回復を目指す民衆運動であり、偏狭なナショナリズムや排外主義とは対極的な動きであった。その歴史的経験を捨象し、単なる衆愚政治と同一視することは、現代の政治状況を見誤ることになるというのである。

それでは、歴史的経験としてのポピュリズムとは何か。また、なぜエリートはポピュリズムに拒絶反応を示してきたのか。本書では、アメリカ人民党の経験を振り返ると同時に、こ

れに対するアンチ・ポピュリズムの歴史をたどることで、「反動のレトリック」としてのその本質を浮き彫りにしていく。

人民党の歴史が示すのはポピュリズムの実際の姿である。南北戦争後、金本位制の実質的な導入がデフレーションを生じさせ、農作物価格は下落した。その一方で、金ピカ時代の資本家たちは投機を通じて私腹を肥やしていた。この不条理に対してアメリカ南西部の農民は立ち上がった。この運動は、エリートが「文明の中心的な柱」と位置づけた金本位制に反対し、農村と都市の壁を超え周縁化された人々を巻き込んでいく。ボトムアップ型の運動にとって、生命線は連帯の輪を広げることであり、その門戸は女性や移民、人種マイノリティにも開かれていた。彼彼女らを束ねることが、人民党の「オマハ綱領」（1892 年）に見られるような民主的な経済改革にとって、必要不可欠であった。この多元主義的な側面は、二大政党と比較して、経済面だけではない人民党の独自性を示している。ポピュリズムとは、その始まりにおいて「アメリカ社会の下層にある人々の怒りの爆発」であり、「普通のアメリカ人（rank-and-file Americans）がともに闘えば国家の不平等なシステムは変えられるという考えに至った典型的な大衆運動」であった（p.19）。

アメリカ人民党は、世紀末には二大政党を脅かす存在へと成長したが、1896 年の大統領選に敗北後、急速に衰退していった。だが、本書によれば、その歴史的経験と精神は、1930 年代のニューディールや 1960 年代の公民権運動へと受け継がれていくことになる。たとえば、公民権運動を支えた「民主社会を目指す学生組織」（SDS）のスローガンは「人民に決定させよう（Let the people decide）」（p.183）であった。ポピュリズムの出発点はエリートも失敗するという当然の前提である。エリートの失敗が社会の不平等を作り出したとき、あらゆる背景を持つ人々が民主的に見直しを求める運動が「真のポピュリズム（genuine populism）」なのである。

ところで、ポピュリズムがあるところにはアンチ・ポピュリズムがある。アンチ・ポピュリストは、政治的な著作や発言だけでなく小説や映画でお決まりのレトリックを引用し、ポピュリズムのステレオタイプを再生産してきた。そこでは、ポピュリズムは「デマゴーグが愚かな人々を導く、根拠のない恨みに満ちた危険な運動」（p.13）として描かれるのである。本書は、典型的なポピュリズム運動が登場した 1896 年、1936 年、そして今日に焦点を絞りながら、レトリックに隠されたアンチ・ポピュリズムの本質を暴いていく。

アンチ・ポピュリズムのストーリーにおいて、民衆は驚くほど非合理的である。デマゴーグが偏見、権威さらには憎悪によって扇動すると、民衆は簡単に騙される。民衆はエリートのようにみずからの利益を冷静に判断することができないのである。ここにアンチ・ポピュリズムの本質がある。それは、本書が「民主主義の恐怖（Democracy Scare）」と呼ぶ、人民

主権と民主的参加についての悲観主義である。アンチ・ポピュリストにとって、民衆は無知で愚かな人々であり、彼らが政治に関われば、それは衆愚政治という悲劇である。

現代のアメリカ政治の問題点は、リベラル派がアンチ・ポピュリズムの立場に転じたことである。フランクリン・ローズヴェルト以降、民主党は、資本家層に対抗する民衆を支持することで多数派の獲得に成功した。そこには、民衆を信じ、民衆のニーズに応え、怒りを進歩に変えるリベラリズムの伝統があった。しかし、1970年代から民衆の政治的能力を信用する「ポピュリストモデル」からエリートの統治を意味する「リベラルモデル（エリートパラダイム）」へ次第にシフトしていく。それには2つの理由があった。第一に、リベラル・エリートは、マッカーシズムや1960年代の社会運動を通じて、民衆の敵意がみずからに向く危険性を感じ取っていた。第二に、彼らは、高度経済成長の終焉と財政赤字の拡大を背景に、民衆の生活を犠牲にしてでも、公共部門の民営化や社会保障の縮小・再編など、福祉国家の見直しを訴えた。責任あるエリートが、非合理的な民衆に代わって、小さな政府への転換という賢明な判断を下さなければならないというのである。民衆は、もはや良き隣人ではなく、エリートが管理する世界の余計者であった。彼らは、思考や理性といった「高次の能力」に基づく能力主義的（メリトクラテッィク）な社会を構築し、民衆を政治的決定から周縁化していった。その結果、今日において民主党はエリート主義政党に変貌し、「エリートに対する抗議の党」のポジションを共和党に明け渡している。アンチ・ポピュリズムの担い手が、保守的な資本家層からリベラル・エリートに移ったのである。

とはいえ、本書によれば、共和党のポピュリズムは「擬似ポピュリズム（pseudo-populism）」である。確かにロナルド・レーガンによって始められたポピュリズムは、選挙の勝利と小さな政府の実現を目指してエリートを攻撃した。ただし、その受益者は民衆ではなかった。擬似ポピュリストの反乱は、減税、規制緩和、脱工業化さらには労働組合の破壊を通じて労働者の権利を剥奪し、ウォール街に大きな利益をもたらした。擬似ポピュリズムは、かつてのポピュリストたちが抱いた経済的平等の夢を打ち壊したのである。この擬似ポピュリズムの後継者がトランプである。彼は、リベラル・エリートを批判しながら、富裕層のために働いているのである。

では、リベラルはどこに向かうべきか。その答えは、エリートではなく民衆に、メリトクラシーではなく「真のポピュリズム」にある。民衆を恐れ象牙の塔に引きこもるのか。民衆を信じ路上に現れるのか。本書はリベラル派に問いかけるのである。

2016年のアメリカ大統領選以降、日本でもポピュリズム論が氾濫し、ヤン＝ヴェルナー・ミュラー『ポピュリズムとは何か』（2017年）、カス・ミュデ＆クリストバル・ロビラ・カルトワッセル『ポピュリズム――デモクラシーの友と敵』（2018年）、そしてヤシャ・モン

ク『民主主義を救え！』（2019 年）などが相次いで翻訳された（Müller 2016 = 2017; Mudde and Kaltwasser 2017 = 2018; Mounk 2018 = 2019）。しかし、これらは、いずれもポピュリズムを衆愚政治と同一視し、民主主義への脅威として捉える点で、反動のレトリックの系譜に属するといえるだろう。これに対して、アメリカ人民党の歴史を振り返り、ポピュリズムとアンチ・ポピュリズムのせめぎ合いの歴史を振り返る本書は、ネオリベ時代の政治の閉塞状況を打破し、かつてリベラルが民衆とともに夢見た、平等で民主的な社会を拓く筋道を示してくれる。

参照文献

Frank, Thomas, 2004, *What's the Matter in Kansas: How Conservatives Won the Heart of America*, New York: Metropolitan Books.

————, 2016, *Listen, Liberal: Or, What Ever Happened to the Party of the People?*, New York: Metropolitan Books.

Mounk, Yascha, 2018, *The People vs. Democracy: Why Our Freedom Is in Danger and How to Save It*, Cambridge, MA; London: Harvard University Press.（吉田徹訳，2019，『民主主義を救え！』岩波書店.）

Mudde, Cas and Cristóbal Rovira Kaltwasser, 2017, *Populism: A Very Short Introduction*, Oxford; New York: Oxford University Press.（永井大輔・髙山裕二訳，2018，『ポピュリズム――デモクラシーの友と敵』白水社.）

Müller, Jan-Werner, 2016, *What is Populism?*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.（板橋拓己訳，2017，『ポピュリズムとは何か』岩波書店.）